

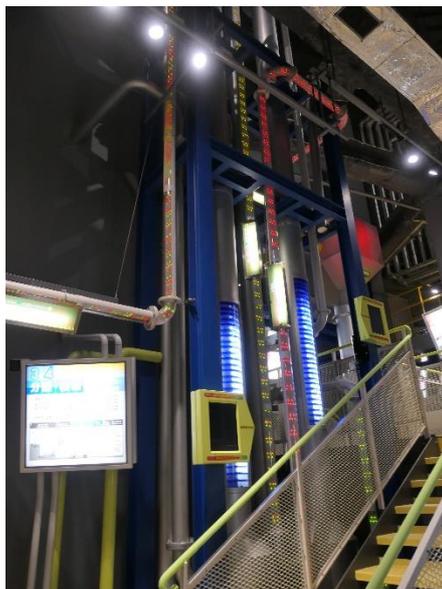
むつフィールドワークを行いました！

人間科学研究科教授 村本邦子

むつでの最終プロジェクトは8月27日であり、コロナ感染症者数もまだ多い状況だったため、残念ながら今年もオンラインでの開催となりましたが、感染状況も落ち着いてきた10月15日（金）から17日（日）、下北のフィールドワークを実施することができました。

六ヶ所村からむつ、恐山、大間と自分たちで回る予定をしていましたが、プロジェクトの始まりからずっと中心的にお世話くださっていた杉浦裕子さん（元むつ市児童相談所）がご案内くださることになり、杉浦さんご夫妻にはすっかりお世話になりました。

15日、七戸十和田駅でピックアップしてもらい、六ヶ所村へ。私は何度も行っていますが、院生たちには是非、六ヶ所村の様子とともに原燃PRセンターを見せたいと思いました。PRセンターでは、杉浦さんがガイドの予約をしてくれていたため、初めてガイドツアーに参加しました。限られた時間でガイドされる内容は、自分自身で見て回るのとはまた少し違って、核燃料の再利用がどれほど合理的で良いものかということが強調されているように思いました。



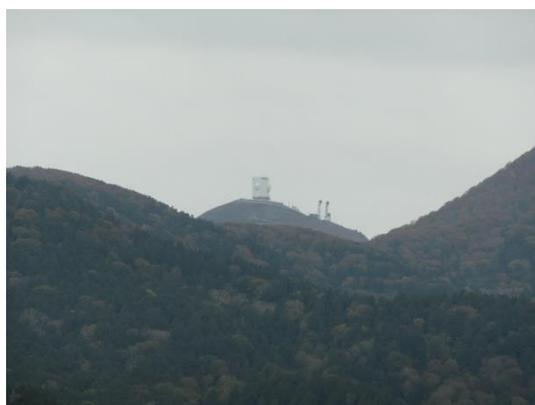
それから日が落ちる前にと、尻屋岬まで車を走らせ、灯台と寒立馬を見せてもらいました。下北には十年通ってきましたが、何しろ遠いので、尻屋岬まで来るのは初めてでした。いつもポスターで見ていた寒立馬と会い、その愛らしい姿と優しい振舞いに、またひとつ下北の新たな魅力が加わりました。



夜は、むつの「なんこう」で、むつ市児童相談所の真手課長と PTA 連合の大見会長を交えた交流会を持ちました。むつでのプロジェクトは今年で最終となりますが、現地では、このプロジェクトを今後も継続して開催して下さる予定で、その打ち合わせも兼ねたものでした。こんなふうに暖かい関係が築き上げられてきたことは本当にありがたいものです。その夜は、例年通り、むつグランドホテルに宿泊しました。



10月16日(土)朝、7時半にロビー集合。恐山へ。ある意味で、東北の死生観を表す場所でもあります。何度も来ましたが、今回、あらためて地形が変わっていることを感じ、台風や大雨などで容易く地形が変わるのだろうと思いました。宇曽利湖の色が硫黄で黄色く染まっているのを見たのも初めてで、時期や気候によっても変わるのかもしれませんが。この湖は、何か人を引き込んで離さないパワーを感じさせるもので、院生たちもかなり強いインパクトを受けたようでした。それにしても、恐山の正面に見える釜臥山のガメラレーダーは何とも興ざめな感じがします。



台風の影響で予定していた道路が遮断されているということで、予定と違う経路で川内ダムへ行きました。川内川は昔から氾濫を繰り返し、大きな被害をもたらしていたこともあり、水源としてダムが建設されることになり、1981年、36戸の全戸移転があり、20年の歳月を経て、1993年竣工となったそうです。ダム湖にかかった橋に並んだ当時の地元小中学生によるリリーフが並び、とても興味深いものでした。このうち複数の学校はすでに廃校となっているそうです。1992年の作品ですが、学校ごとに工夫がこらされ、大きくなったら「パチンコやになるぞ」「老人ホームで働きたい」「お父さんの工場で働く」「悪人を注意する婦人警官になりたい」など、将来の夢なども書かれ、この子どもたちは今頃どうしてるのかなと想像を巡らせました。歴史を感じさせる興味深い企画だと思いました。



その後、佐井村にある三上剛太郎の生家に案内してもらいました。三上家は代々医者の家系で、剛太郎も、新聞記者を経て村医となりました。1905年日露戦争で軍医として従事し、満州に野戦病院を設営して治療にあたっていました。攻撃の危機に曝された時、ジュネーブ条約を思い出して、手縫いの赤十字旗を掲げて、敵味方なく多くの負傷兵の命を救ったということです。退役後は村に帰り、村医として地域医療に勤め、生涯勉強であると、晩年はフランス語を独学し、90才にて『レ・ミゼラブル』を言語で読んだそうです。1963年、ジュネーブで開催された赤十字の百周年記念イベントでは、赤十字の心としてこの旗が展示されました。初めて知る話でしたが、下北の小さな村に立派な人がいたのだと感銘を受けました。



それから、大間のあさこハウスに向かいました。わかりにくい監視のいる入口から、有刺鉄線にはさまれた細い道を走り、建設中の大間原発の建屋が見えるメルヘンチックな庭と家です。厚子さんは、相変わらず笑顔で暖かく私たちを迎えてくれました。あさこハウスの話は、院生たちにも強い影響を与えたことと思います。





それから遠い道のりを車で走り、すっかり夜になってしまいましたが、八戸まで戻りました。翌朝は有名な館鼻岸壁朝市を経験した後、津波伝承館（みなと体験学習館）を訪れ、蕪島神社、是川縄文館、種差海岸まで案内して頂きました。八戸は私も初めてでしたが、車の中で、八戸で育ったという杉浦さんの昔の話や被災当時の話を聞かせてもらったことで、イメージも膨らみ、院生共々貴重な体験となりました。杉浦さんご夫妻には、本当にお世話になりました。



遙かな草原に林立する風車。群生するタンク。水色の工場。揺れる山道を抜けると、その道程とは不釣り合いに整備された街があった。「あの世」の湖の奥には、白く光るレーダーが鎮座していた。監視を横目に鉄のフェンスを分け入ると、そこにはどこか懐かしく、どこか淋しく、それでいて明るい、素のままの日常が佇んでいた。

これらは私が目にしたものの一部である。本州の最果て下北半島で、周辺人たる私たちが待ち受けていたのは、不自然な自然だった。それは、私が持つどんな言葉をも跳ね除ける重量で立ちはだかった。その感覚はある意味で認知的不協和、またある意味でダブルバインドだった。矛盾の真っ只中で無防備だった私には、どこか遠くの映画のワンシーンを観ているようにすら思えた。あるいは、一旦そう思っておく他になかったのだろう。そうでなければ自己の揺らぎに耐えきれなくなってしまうからだ。だが、これはファンタジーなどではなく、確かにそこに在る現実なのだ。

言い換えるなら、私が感じたのは圧倒的な無力感だった。目の前の現実を説明する言葉を持たない心理学や対人援助の知識の無力。感じることも、考えることも出来ぬままに、ただキャンピングカーに揺られ、次々と連れていかれるだけの私の無力。

そんな無力の果てで、際立つものがあつた。ひとつは、人間によるどんな思惑にも、開発にも、狼狽にも、揺るがずそこに在り続ける自然への畏怖である。太平洋と津軽海峡を望む尻屋岬の風はひどく冷たかつた。見渡す限りの海と大地に、人間の非力さを想つた。顔を上げると空は赤らんでいて、刻一刻と表情を変えながら煌めくその様は、冷えた身体を暖めるようだった。元来人類は、そんな自然の脅威と恵みに対峙する中で文明を築いてきたのではないか。そういう土台なしに人間や社会を理解することはあまりに心許ない。

無力な私の目に際立つたもうひとつは、共振する他者の存在である。険しい大地を進む車内を囲うテーブルは、人と人の共振の場だった。異郷の他者である私たちが、その土地を生きる人たちと共に旅をすることで立ち上がる語りには、あの時あの場所でしか生まれ得なかつた迫真性がある。東通村の社会的養育。丘から見物した八戸の津波。変わりゆくものと変わらないもの。異郷の者たちが語らうことで、荒削りだった現実が奥行きを見せていく。こういう出会いの中に、ほんとうに役立つ言葉があるのだろう。そうした言葉を拾い上げてゆくことが旅人の役割であり、証人の役割なのだろう。

非力でも、不格好でも、異郷の他者、周辺の他者が分け入ることによって動き出す場があり、立ち上がる言葉がある。不自然な自然と、畏るべき自然を背景に浮かび上がったのは、

人間のありふれた日常だった。その日常に、人間科学を学ぶ者として繰り返し立ち返りたい。  
そして、私の中で未定のまま取り残された現実の意味を、繰り返し問うていきたい。



## むつフィールドワーク・レポート～下北アンビバレンス

臨床心理学領域 M1 大谷通高

今回のフィールドワークで、はじめて下北半島に赴いた。現地に住む杉浦夫妻が3日間にわたってアテンドしてくださり、非常に充実したフィールドワークとなった。初日の七戸十和田を出発点に、むつ市、尻尾崎、恐山、大間、佐井村、あさこハウス、八戸と、杉浦夫妻の自前のキャンピングカーで下北半島をぐるりと回り、暮らし・土地・自然を組み合わせた下北を体感することができた。原発関連施設だけでなく、下北半島の自然地を巡りながら、

地元の名士にまつわる場所に加え、町々の様子もあわせて杉浦さんの解説が添えられて、そのすべてをここで記すには紙幅が足りない。だから、ここでは今回のフィールドワークで抱いた下北半島の印象と、八戸でのちょっとした小話を書いておく。

今回のフィールドワークで感じた下北半島の印象は、「アンビバレンス」である。下北を巡る道中は、広大で豊かな自然と、軍事施設を含む科学技術の粋を集めた施設とが入り混じる特異なもので、特に原発関連施設は、その建物ごとのスケールが非常に大きく、下北の自然のなかにドカッと存在感をもって点在していた。道行きの車窓には、木々から空に突き抜けた巨大風車がゆっくりとまわり、豊かな自然と巨大な人工物の存在感とが日常に溶け込んでいた。こうした下北の風景に身を置いたとき、普段の自分が全く逆の環境に身を置いていることに気づかされる。普段私は、街で暮らしており人工物に囲まれたなかに自然が点する環境に身を置いている。それもまた特異なものであるのに、それが「普通」であるとして下北の風景に圧倒されることもまた奇妙な感覚としてある。下北での、新旧の建物が入り混じる地域の集落、自然の恵みを扱う営みと科学技術を扱う営みとが混濁した日常、町々の暮らしも自然と科学のちぐはぐな関係も、自分が身を置く環境への違和もあわせて、今回の下北のフィールドワークで「アンビバレンス」な感覚に巻き込まれた。

さて最後に八戸での小話だが、二日目の夜、八戸の「みろく横丁」付近の居酒屋で食事を終えてこの付近を散策した。横丁の辺りは繁華街らしく、路上には声を張り上げて盛り上がる人たちもいる。酔いの街の賑わいを感じながら、ふらふら街の飲み屋が雑居するビルに入る。その雑居ビルにあるカフェ&バーにお邪魔し、二杯ほどお酒を頂いたが、そのとき相手をしてくれたバーテンダーの男の子の話は土地深いものであった。

その男の子は20代前半ほどの整った顔立ちの青年で、このバーに勤めて3年になると愛想よく話してくれた。その話を聞きこむと、自分は八戸が地元で、高校は水産高、卒業後は船の経験をもったからタンカー船（おそらくは石油）で半年ほど働いたと。タンカー船の就労は船上での生活が主となり、ネットも電波もつながらない娯楽も人間関係も少ない空間・時間で、その過ごし方に悩んだこと。はじめにDVDで映画鑑賞を試みたこと、それでも飽きてしまい、釣りをするようになったこと、やっぱりそれも飽きてしまって、どうにもならなかったこと、給料は良かったけれど耐えられずに半年で辞めたことを、今の仕事の楽しさと比較しながら語ってくれた。その後、国際的な和太鼓集団に所属し、練習生で過酷な下積みを経験したこと、ロシアやフィリピンで和太鼓講師を勤めあげながらも、どうしても待遇に納得できず同僚の後輩と一緒に団長に直談判して辞めたこと。そして地元の八戸に戻ってきたこと。話を聞いた限りのその青年の営みは、今も八戸の営み（彼の場合は水産や今勤めているバー）のうえにある。人それぞれの生きる力はその土地土地に影響を受けて、今日もそれぞれの日常が紡がれている。



## むつプロジェクト フィールドワーク・レポート

### 対人援助学領域 M2 武政詩帆

本年度のむつプロジェクトは、例年ならば現地で行っていた支援者支援セミナーやお父さん応援セミナー等の催しがコロナの影響によって zoom で開催することとなった。そのため、丸三日間全てをフィールドワークに費やすことができ、大変充実した学びを得ることが出来た。

むつフィールドワークで何よりも印象に残っているのは、大間原発関連の施設とあさこハウスである。あさこハウスを訪ねて厚子さんにお会いするまで、あさこハウスに早朝4時から何度も見張りの人間がやってきたり、家の前に動物の死骸が置かれていたり、厚子さんの飼っているヤギが不審な死に方をするなどといった数々の凄まじい人権侵害を受けていることを知らなかった。そうした話をあっけらかんと明るい口調で話しながら、あさこハウスとその周辺の土地を守りつつ、あさこハウスの近くにいた原発作業員にアイスを配ってあげたりもしている厚子さんの力強くも優しさを忘れない姿勢に強い感銘を受けた。厚子さんの土地の恵みと共に生きる姿に、都会で原発の恩恵のみを受けている自分の暮らしのあり方について改めて考えさせられた。

原発 PR施設や原発によってもたらされた巨額の交付金によって作られた豪華で綺麗な建物の数々は、先祖代々の土地を守りながら土地とともに暮らすあさこハウスのあり方と対照的な存在であると感じた。六ヶ所原燃 PRセンターやトントウビバレッジは、子ども向けの無料イベントを頻繁に開催していることを杉浦さんから教えて頂いた。杉浦さんの

お孫さんもトントウビバレッジが好きなのだと仰っていた。また、どの原発 PR 展示でも、日常的に食べている食べ物の中にも放射性物質は含まれているとしきりにアピールしていたのが印象に残っている。原発推進側はこのようにして地域住民の方々から原発問題について目を逸らさせ、口を噤ませているのだと痛感した。大間原発関連施設とあさこハウスを訪ねて、原発エネルギーに頼らなくていい生活を実現するにあたって自分が行動できることは何なのか、考えていかなければならないと思った。

また、八戸市みなと体験学習館では、八戸市の東日本大震災での被害について実感を持って学ぶことが出来た。東日本家族応援プロジェクトでむつ市に行くと友人に伝えた時、「青森ってあんま震災関係ないのにどうして青森に行くの?」と言われたことがある。1日目に楠こうで一緒にした PTA 会長の方も「被災三県じゃないのにどうして東日本・家族応援プロジェクトに入っているのですか。」と仰っていた。確かに青森県は、被災三県ほど多数の方が亡くなったわけではない。だが、乗り上げた漁船や停電した市内の様子、地球深部探査船「ちきゅう」見学中に被災し船内泊を余儀なくさせられた児童たちの写真といったみなと体験学習館の展示で、震災によって八戸市に住む方々の普通の暮らしが奪われてしまった様が痛切に伝わってきた。みなと体験学習館を見学したのが3日目であったことも良かったと思う。1日目、2日目に下北半島を巡って海や大地、市街を見てきたからこそ、被災の展示を身に迫る感覚として捉えることができた。被災三県ではないからこそ見過ごされがちな下北半島における震災被害をきちんと記憶しておきたいという思いとともに、目を引く大きな被害以外にも震災の被害は確かに存在することを忘れてはならないと感じた。そして、むやみに外部の人間が「被災三県じゃないから大きな被害は受けてない」などと断定するようなことは決して口にすべきではない。

そして、杉浦さんが3日間すべての日程をキャンピングカーで案内して下さったおかげで、当初の予定より多くの場所を訪れることができた。当初予定していた恐山や尻屋岬はもちろんのこと、蕪島神社や種差海岸、是川縄文館などといったたくさんの下北半島の豊かな自然と文化に触れることが出来た。また、キャンピングカーの中で過ごす時間の中で、下北半島の伝統的な貫いっ子制度やいぶし親の話など、杉浦さんや先生方のお話からも貴重な学びを得ることが出来た。

下北半島は、自分が想像していた以上に豊かで美しく、人の温かい土地（3日目の朝、バス停を探していると通りかかった地元の方がわざわざ声をかけて下さり、案内して下さった）で、もう一度絶対に来たいと思った。しかし、魅力あふれる土地の端々にどうしても原発や軍事関連の暗い影がちらついて見えた。まるで異世界に来たかのような恐山極楽浜の風景から、景観を損なう雰囲気醸成すガメラレーダーが目に入る。原発関連交付金による見た目だけはきれいな諸々の施設は土地から浮いており、おいしい海の幸を食べていてもふと米軍が訓練で事前予告もなしに小川原湖に落下物を落としていくことが思い出された。あさこハウスの厚子さんや是川縄文館でみた縄文人のように、土地と自然を大切に暮らしていくことを多くの人々が選んでいけたら、こうした問題も変えていけるのかもしれない。

ない、などということを考えているが、正解はまだ見つからないので、これからも考え続けることをやめずにいたいと思う。

今回のフィールドワークで経験出来たことを「証人」としてしっかりと記憶し、伝えていきたい。

